☆真宗大谷派　永寶山 浄敬寺ホームページ
https://eihozan-jyokyoji.com/
ホームページをリニューアルしました

☆Instagram
JYOKYOJI_KASHIWAZAKI

浄敬寺だより
（じょうきょうじ）

庫裡改修工事特集

発行日 令和六年八月十三日 第四十三号

高野建設社長・設計士栗原氏

お茶休憩中の大工さん

5/21 報恩講お引き上げ　講師 今泉温資師

7/14·15 盆参会　法話･･･14 日住職、15 日晴香

【法語】

親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念仏もうしたること、いまだそうらわず。

『歎異抄』第五章

【意訳・解説】

「親鸞は先祖供養のために、一返も念仏を申したことはありません」

ご先祖のためにお供物を用意して供養し、お盆の初日にはご先祖をお迎えに行き、お盆が終われば送り返す･･･というのが一般的なお盆の認識かもしれません。しかし、親鸞は先祖供養のためのお念仏したことはないと言われました。何故でしょうか。

それは、全ての生きとし生けるものは、いのちの根底のところでつながり合った父母兄弟のようなもので、順番に仏になってゆく身であるのだから、自分の力で念仏をして父母を助けようなどとは思ったことがないというのです。

ここには『念仏』がどのような性質のものかが同時に説かれています。「南無阿弥陀仏」と自分が念仏を称えたようではあるけれども、その念仏は誰一人漏らさず救うと誓われて仏になられた阿弥陀仏のはたらきが声になったものです。その声が届いたということが、私たちにとっての救いです。

☆巻頭法話

異常気象が普通になってしまったような近年の気候です。東北地方は目を疑うような豪雨で甚大な被害が出ています。正月の能登半島地震といい、災害はあっという間に私たちの日常生活を奪っていきます。普通であることの有難さは被害を受けてみないと気づかないことを中越沖地震で身をもって体感したはずですが、時が経つと忘れてしまうというのが私たちでもあります。

昨年以来皆様には寺の庫裡耐震・リノベーション工事のお願いをし、お陰様で四月から工事に着工することができ、順調に進捗しています。多大なご負担をお願いしている中で、ご理解とご協力をいただいておりますことに心より感謝申し上げます。正月の地震に遇って、耐震工事をさせていただくことの重要さも改めて感じているところです。九月までかかる工事になりまして、ご門徒の皆様には今しばらくご不便をおかけしますが、どうかよろしくお願い申し上げます。

さて、この度の東北豪雨をニュース等で見ました時に、被害に遇われた住民の方々に対する心配の気持ちを感じたのは皆様同様のことと思いますが、私はもう一つ、というよりも一番先に思ったことは私の三女が嫁いでいる地域の被害の心配でした。秋田県能代市に居住しておりますので直ぐに大丈夫かと連絡し、無事であると聞いて安心し、それ以後はどこか他人事のようにニュースを見ている自分に気が付きました。能登半島地震でも自分の知り合いの方の無事ばかりに囚われ、無事が分かるとどうしても第三者的な眼で見ている自分が否めません。そう考えますと、日常のあらゆることを考える時に私たちは先ず自分にとってどうなのかということを中心に考えてしまい勝ちです。自分中心、それは一概に間違っていることとは言えませんが、自分以外のところでも同様な苦しみや悲しみがあるのだということを忘れてはなりません。親鸞聖人は念仏の教えをいただく私どもを御同朋、御同行とおっしゃられ、人々の様々な苦しみや悲しみを共にして歩まれた方でした。他人の苦しみ悲しみを我が苦しみ悲しみとしていくということは決して易しいことではありませんが、戦争の止まない世界の中で、苦しんでいる人々の姿を見るにつけ、念仏の教えをいただく私たちに問われている大切な心とは何かということを考えさせられます。間もなく庫裡の工事も終了いたします。安全できれいになった庫裡で、また皆様と共にお念仏の教えを聞いてまいりたいと願っております。

今回、修復工事のこれまでの写真を掲載いたしました。百年以上の歴史ある浄敬寺の変貌をご覧いただきたく存じます。

合掌

（住　職）

☆庫裡便り

浄敬寺の日々の出来事から坊守の所感をお伝えします。

◎今工事中の庫裡は、慶応三年頃建てられたと言われています。江戸時代の末期、大政奉還の年（一八六七年）であり、翌年が明治元年になります。

それまで他の地に建っていたものを仮本堂・庫裡として移築したものだそうですので、建材はもっと古く二百年以上前になるのではないでしょうか。写真でも分かるように、江戸時代の建築様式で、大きな梁や木組み、小舞壁を見ることができました。先代、先々代の住職寺族の生活、ご門徒の方々とのつながりを思い起こす機会をいただきました。この有難いご縁を機に、ご門徒の皆様が集いやすい場、仏法聴聞の場として寺が存在していくよう努めて参りたいと思っています。

◎三番目の孫の弘信が、八月七日に本山で得度式を受けました。別院で得度考査を受けた後、朝本堂でお参りして登校していました。二人の兄の得度の後、本人は受式に消極的な様子でしたが、いのちの大切さを受け止めていく心が育ってきているのだと思い、住職とともに感動しています。

（坊守）

◎弘信の得度式に立ち会うため、家族五人で真宗本廟（東本願寺）にお参りしてきました。子ども達も大きくなり全員で移動する機会も減っていた中、良いご縁をいただきました。「おめでとう」という言葉に込められた願いを聞きながら歩んでもらえたらと思っています。

（准坊守・晴香）

得度式中に
浄衣（じょうえ）から直綴（じきとつ）へ

墨袈裟（すみげさ）・法名（ほうみょう）を授与され、僧侶となりました

庫裡改修工事の進捗状況

＊着工まで

会議を重ね、三月六日に責任役員の今井長司氏立ち合いの元、契約書にサインしました

工事前に境内の整備

＊ビフォー＆アフター（撤去前）

今の本堂が落成する前のお内陣

お斎会場として、また法事の際には皆様にお休みいただいていた広間。襖や障子戸は極力再利用。物置として使われていた二階も改修。

＊アフター（撤去後）

天井や壁を落とすと、昔ながらの大きな梁や木組み、小舞作りの壁、昔の電気の配線や碍子（がいし）等々を見ることができました。

＊耐震補強

床板をはがすと、大きな石の土台を見ることができました。砂地でしたので、鉄筋を敷き、コンクリートを流してもらいました。また、昔ながらの壁が少ない作りの為、筋交いを入れた壁を数か所に増設しています。

＊屋根・外壁

GW頃の晴れ間に
屋根瓦の作業

本堂を越えて
運ばれる瓦

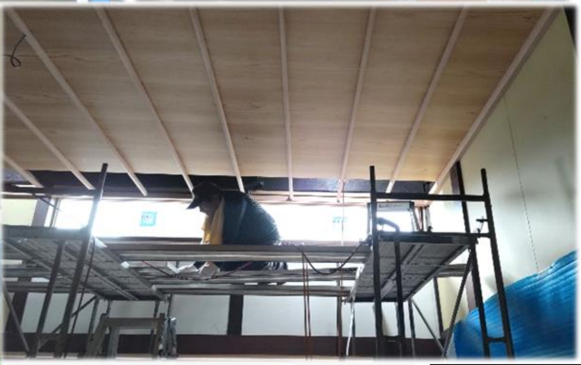
＊トイレ

旧女性トイレは多目的トイレに、旧男女共用トイレは男性トイレに、新たに女性トイレを新設しました。

多目的トイレ

女性トイレを新設した為、中庭の植木を移動し土台からの作業でした。

*天井



七月末から天井の板が入り、古い木組みや梁が隠れました。高所の作業の様子。

元旦の能登半島地震について

*浄敬寺の被害…本堂の壁にひび割れ・剥離等の被害

庫裡改修工事が落ち着きましたら、部分補修の予定です。

*被災地への支援金について

年中行事等で呼びかけさせていただいた義援金を左記の通りにお届けさせていただきました。

・一月十五日　一万円
　真宗大谷派金沢災害支援ネットワークへ

・一月十五日　一万六五〇〇円
　真宗大谷派災害支援北陸門徒ネットへ

・八月五日　二万五四七〇円
　真宗大谷派新潟教区　能登半島地震義援金へ

☆二〇二四年後半の行事予定

八月十三日～十六日　盂蘭盆会（お盆）
　＊十三日・・・午前六時より　本堂にて勤行

九月十九～二十五日　秋彼岸
　＊お中日　二十二日（秋分の日）午前十時半～法話 勤行
　　　　　　　　　　　　　　　　おときはお持ち帰り

十月十二日（土）『歎異抄』をよむ会　午前九時より

十一月五～八日　三条別院報恩講
　＊五日（火）午前十一時より　お待ち受け音楽法要
　＊団体参拝は八日を予定しております。別途ご案内します

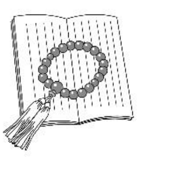
十一月九日（土）『歎異抄』をよむ会　午前九時より

十一月十二・十三日　有縁講

十二月十五日（日）　年末法話会　午後一時半～四時
　講師　田澤　一明　師
　（新潟市明誓寺 御住職）

二〇二五年一月一日　修正会勤行　朝六時より
　一月一～二日　年始参
　＊真宗門徒の一年は、御本尊のお参りから始めましょう

定例法話会『歎異抄をよむ会』のご案内
・基本的に第二土曜日午前九時より
・内容『歎異抄』の解説、正信偈のお勤め
　（終了後、ささやかな茶話会あり）
・持ち物　赤本・念珠・『歎異抄』の冊子



☆編集を終えて…

今号は庫裡改修工事特集号とさせていただきました。皆様の御協力により、順調に工事をすすめていただいております。工事中にしか見ることができない梁や小舞壁、床下の様子を撮影しておりましたので掲載しました。ご覧ください。

六月三十日に当院の母（永徳寺坊守・渡邊正子）が還浄いたしました。六月七日の緊急入院から、検査のたびに残された時間が減らされていき、私たちも右往左往するばかりでした。一度だけ一時帰宅できた際に、帰敬式を受けてもらうことができ、喜んでいた姿が印象的でした。教区や組の活動には関りを控えていた義母ですが、私たちのことはよく理解して影で応援し、孫の成長を喜んでくれていたようです。この「いのち」は預かりもので、生まれた以上いつかは返していかねばならないことは頭の中では分かっていたつもりですが、身近な方の死を通して、自身の身の上のこととなると本当に受け入れがたいことであると感じています。

改修工事後の浄敬寺の庫裡が、人生における悲しみや不安を共有していける場として、これまで以上に機能していけるように願っております。

（晴　香）